主な英語の資格・検定試験

2015/09/29版

試験名	実施団体	受験人数	年間実施回数	成績表示方法	出題形式: 実施方式 (*1)	受験料
Cambridge English (ケンブリッジ英検)	ケンブリッジ大学 英語検定機構	国内人数非公表 ※全世界では約250万人	2ー3回	KET/PET/FCE/CAE/CPE(5つ) CEFR、合否、 スコア(80-230)、グレード	**L, R, W**: 紙/CBT **S**: ペア面接	PET(B1) 11,880円～ KET(A2) 9,720円～(*5)
実用英語技能検定	日本英語検定協会	約263.5万人 (H26実績)	3回	1級～5級 合否による表示 H27~スコア・バンド併記	**L, R**: 紙/CBT **(W)**: 紙 **(S)**: 面接/CBT (*2)	2級:5,000円 準2級:4,500円
GTEC CBT	ベネッセコーポレーション Berlitz Corporation ELS Educational Services ※一般財団法人進学基準研究機構(CEES)と共催	非公表	3回 (H27)	0-1400点	**L, S, R, W**: CBT	9,720円
GTEC for STUDENTS	ベネッセコーポレーション Berlitz Corporation ELS Educational Services	約73万人 (H26実績)	2回	0-810点	**L, R, W**: 紙 **S**: タブレット	3,080円 L, R, W 5,040円 L, R, W, S
IELTS	ブリティッシュ・カウンシル、 ケンブリッジ大学英語検定機構 日本英語検定協会 等	約3.1万人 (H26実績) ※全世界では250万人	約35回	1.0-9.0 (0.5刻み)	**L, R, W**: 紙 **S**: 面接	25,380円
TEAP	日本英語検定協会	約1万人 (H26実績)	3回	80-400点	**L, R, W**: 紙 **S**: 面接 (*4)	15,000円
TOEFL iBT	テスト作成: ETS 日本事務局: CIEE	非公表	40ー45回	0-120点 (4技能を各0-30点で評価)	**L, S, R, W**: CBT	230USドル
TOEFL Junior Comprehensive	テスト作成: ETS 日本事務局: GC&T	非公表	2ー3回	0-352点	**L, S, R, W**: CBT	9,500円
TOEIC	テスト作成: ETS 日本事務局: IIBC	約240万人 (H26実績) ※TOEICプログラム全世界約700万人	10回	10-990点 (L、R各5-495点)	**L, R**: 紙	5,725円
TOEIC S&W	テスト作成: ETS 日本事務局: IIBC	約2.4万人 (H26実績) ※TOEICプログラム全世界約700万人	24回	0-400点 (S、W各0-200点)	**S, W**: CBT	10,260円

*1: L=Listening, S=Speaking , R=Reading, W=Writing　*2: Wは1級・準1級(H28から2級に導入)、Sは3級以上　*3: Sはオプション

*4: L/R, L/R/Wでも受験可能　*5: 実施試験センターにより異なることあり

主な英語の資格・検定試験の出題意図・語彙数　等

2015/09/29版

試験名	目的・出題意図	語彙数	国際通用性 ①実施国数 ②主な活用地域 ③海外団体との連携
Cambridge English （PET:CEFR B1）	英語圏における日常生活に必要とされる実践的な英語力があるかを評価する	3,000語程度　（*1）	①約130ヵ国 ②英国、欧州、オーストラリア、ニュージーランド ③CaMLA（米国ミシガン大学）、OET（豪州）等
実用英語技能検定 （2級：CEFR B1）	英語圏における社会生活（日常・アカデミック・ビジネス）に必要な英語を理解し、使うことができるかを評価する	4,000語程度　（*2）	①約50ヵ国 ②アメリカ、オーストラリア、カナダ等 ③アジア6地域7団体およびCRELLA（英国）
GTEC CBT	英語を使用する大学で機能できる（アカデミックな）英語コミュニケーション力を測る	3,000～6,000語程度 （CEFR C1まで）	②北米（ELS Educational Services）
GTEC for STUDENTS	英語によるジェネラルな状況におけるコミュニケーション能力を測る	3,000語以下 ※タイプによって異なる （CEFRB2まで）	
IELTS	英語を用いたコミュニケーションが必要な場所において、就学・就業するために必要な英語力があるかを評価する	5,000～6,000語程度（*2）	①約140ヶ国以上 ②EU諸国、オーストラリア、カナダ、ニュージーランド、アメリカ等
TEAP	EFL環境の大学で行われる授業等で行う言語活動において英語を理解したり、考えを伝えたりすることができるかを評価する	2,000～5,000語程度 （タスクにより異なる）（*2）	③CRELLA（英国）
TOEFL iBT	高等教育機関において英語を用いて学業を修めるのに必要な英語力を有しているかを測ることを目的とする。	(R)　3,000語で90.45%をカバー 5,000語で95.37%をカバー (L)　3,000語で96.22%をカバー(*3)	①約130か国以上 ②英語圏（北米、オーストアリア、ニュージーランド等）、非英語圏（ドイツ、オランダ、トルコ、韓国等）
TOEFL Junior Comprehensive	英語を母国語としない中高生の英語運用能力を世界標準で評価する。	3,000語程度 98%の単語がセンター試験に出現（*4）	①8か国（実施国数拡大中、2技能については既に50か国以上）
TOEIC / TOEIC S&W	和文英訳・英文和訳などの技術ではなく、身近な内容からビジネスまで幅広くどれだけ英語でコミュニケーションができるかということを評価する。	4,000語以上　(*5)	①約150か国

*1: English Vocabulary Profile Wordsに基づいてカウントした概算　*2：BNC(British National Corpus)　*3：BNC/COCA word-family lists＜第1回連絡協議会資料より＞　*4：2006年以降のセンター試験。グローバル・コミュニケーション＆テスティング独自調査（2014年）
*5：外部リサーチャーが独自に行った調査結果「英検2級より多いがテレビ、ニュース番組よりは少ない」からの推計値

主な英語の資格・検定試験のＣＥＦＲとの関係性検証方法

2015/09/29版

試験名	ＣＥＦＲ検証方法	補足事項
Cambridge English （ケンブリッジ英検）	・CEFRと共に開発 （部分的にではあるが、CEFRはCambridge Englishをベースに設計された経緯あり）	・2015年1月よりCambridge Englishスケール（スコア化）をFCE(B2)/CAE(C1)/CPE(C2)に導入、2016年2月よりKET(A2)/PET(B1)に導入して完成予定
実用英語技能検定	・英検Can-doリストとCEFRとの比較 ・専門家によって構成されるパネルを中心として、①Basket法（*1） ②Modified Angoff法（*2）を使用して検証 ・EALTA(欧州言語テスト・評価学会)エキスパート研究者との共同研究 ・他試験結果(TOEFL PBT,iBT等)との比較	・スコア化（英検CSEスコアとバンド）導入 （CEFRとの対応付け、およびIRTを用いた各級の関係性よりスコア化）
GTEC CBT	・実際のGTEC CBT受験者によるCEFRレベル別Can-doアンケート結果により検証 ※科学研究費補助金 基盤研究(A)における「CEFR-J研究開発チーム」の“CEFR-J”デスクリプタを用いて関連づけ調査を実施	
GTEC for STUDENTS	・GTEC for STUDENTSとGTEC CBTのスコアの関連性を前提とし、上記研究内容と結び付けることにより検証。	
IELTS	・有識者によるベンチマーキング ・テスト結果使用者等による関係者からのフィードバックをもとに検証	
TEAP	・Can-do アンケートによるCEFRとの比較 ・独立研究機関（CRELLA）との共同研究 ・他試験結果（TOEFL ITP,iBT等）との比較	・2015年度よりTEAP CSEスコア併記
TOEFL iBT	・Modified Angoff 法（*2）を使用 ・5,000名以上のテスト受験者データを使用 ・大学や英語教師からのCEFRレベルとTOEFLスコアレベルに関するフィードバックも活用	
TOEFL Junior Comprehensive	・Modified Angoff 法（*2）を使用 ・15か国18名の有識者による検討、2技能テストのスタディとの検証も実施	
TOEIC / TOEIC S&W	・Modified Angoff 法（*2）を使用 ・22名の有識者による検討、100,000名以上のテスト受験者データを使用 ・大学や英語教師からのCEFRレベルとTOEICスコアレベルに関するフィードバックも活用	

*1： Basket法 「（問題に対して）CEFRのどのレベルにある受験者であればこの問題に正解できますか？」という分析手法

*2： Modified Angoff法 「（問題に対して）CEFRの各レベルに相当する受験者が100人いるとして、何名がこの問題に正解できるか？」という分析手法